

# 特許協力条約

発信人 日本国特許庁 (国際調査機関)



代理人 前田 弘 様	あて名 〒541-0053 日本国大阪府大阪市中央区本町2丁目5番7号 大阪丸紅ビル
------------------	--

PCT  
国際調査機関の見解書  
(法施行規則第40条の2)  
[PCT規則43の2.1]

発送日  
(日.月.年)

16.8.2005

出願人又は代理人 の書類記号 M04-V-350CT1	今後の手続きについては、下記2を参照すること。	
国際出願番号 PCT/JP2005/009269	国際出願日 (日.月.年) 20.05.2005	優先日 (日.月.年) 21.06.2004
国際特許分類 (IPC) Int.Cl.7 H01L21/3205, C23C16/40, H01L21/28, 21/285, 21/768		
出願人 (氏名又は名称) 松下電器産業株式会社		

1. この見解書は次の内容を含む。

- 第I欄 見解の基礎
- 第II欄 優先権
- 第III欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解の不作成
- 第IV欄 発明の單一性の欠如
- 第V欄 PCT規則43の2.1(a)(i)に規定する新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解、それを裏付けるための文献及び説明
- 第VI欄 ある種の引用文献
- 第VII欄 国際出願の不備
- 第VIII欄 国際出願に対する意見

2. 今後の手続き

国際予備審査の請求がされた場合は、出願人がこの国際調査機関とは異なる国際予備審査機関を選択し、かつ、その国際予備審査機関がPCT規66.1の2(b)の規定に基づいて国際調査機関の見解書を国際予備審査機関の見解書とみなさない旨を国際事務局に通知していた場合を除いて、この見解書は国際予備審査機関の最初の見解書とみなされる。

この見解書が上記のように国際予備審査機関の見解書とみなされる場合、様式PCT/ISA/220を送付した日から3月又は優先日から22月のうちいずれか遅く満了する期限が経過するまでに、出願人は国際予備審査機関に、適当な場合は補正書とともに、答弁書を提出することができる。

さらなる選択肢は、様式PCT/ISA/220を参照すること。

3. さらなる詳細は、様式PCT/ISA/220の備考を参照すること。

見解書を作成した日 28.07.2005	特許庁審査官 (権限のある職員) 綿引 隆	4L	3239
名称及びあて先 日本国特許庁 (ISA/JP) 郵便番号 100-8915 東京都千代田区霞が関三丁目4番3号	電話番号 03-3581-1101 内線 3498		

## 第I欄 見解の基礎

1. この見解書は、下記に示す場合を除くほか、国際出願の言語を基礎として作成された。

この見解書は、\_\_\_\_\_語による翻訳文を基礎として作成した。  
それは国際調査のために提出されたPCT規則12.3及び23.1(b)にいう翻訳文の言語である。

2. この国際出願で開示されかつ請求の範囲に係る発明に不可欠なヌクレオチド又はアミノ酸配列に関して、以下に基づき見解書を作成した。

a. タイプ  配列表

配列表に関するテーブル

b. フォーマット  書面

コンピュータ読み取り可能な形式

c. 提出時期  出願時の国際出願に含まれる

この国際出願と共にコンピュータ読み取り可能な形式により提出された

出願後に、調査のために、この国際調査機関に提出された

3.  さらに、配列表又は配列表に関するテーブルを提出した場合に、出願後に提出した配列若しくは追加して提出した配列が出願時に提出した配列と同一である旨、又は、出願時の開示を超える事項を含まない旨の陳述書の提出があった。

4. 補足意見：

第V欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についてのPCT規則43の2.1(a)(i)に定める見解、それを裏付ける文献及び説明

1. 見解

新規性 (N) 請求の範囲 1-26 有  
                  請求の範囲 \_\_\_\_\_ 無

進歩性 (I S) 請求の範囲 1-12, 14-25 有  
                  請求の範囲 13, 26 無

産業上の利用可能性 (I A) 請求の範囲 1-26 有  
                  請求の範囲 \_\_\_\_\_ 無

2. 文献及び説明

文献1: JP 10-98043 A (シャープ株式会社) 1998.04.14, 全文、全図

請求の範囲13、26に記載される発明は、文献1によって、進歩性を有さない。  
文献1には拡散バリアー材料の表面をプラズマで酸化した後、銅配線を形成する技術が開示されており、当該拡散バリアー材料における酸素の濃度は、膜厚方向に連続的に変化しているものと認められる。

また、文献1に記載されるバリアー材料と銅配線の積層構造を、埋め込み配線に適用することは、当業者が適宜なし得るものと認められる。

請求の範囲1-12、14-25に記載される発明は、国際調査報告で引用されたいずれの文献にも記載されておらず、当業者にとっても自明なものではない。